

小田実全集（小説 第17巻）

海冥

太平洋戦争にかかわる  
十六の短篇



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

海のいくさ	6
船	22
骨	40
肉	58
姦	73
風呂	90
男	106
P―島にて	121
指揮官	138
卒	155
雲、あるいは、愛	175
ジャップ	191
ジョギング	207
海を眺める墓地	222

太平洋の話 —— *tales from the Pacific* ——

舟

あとがきとしての鎮魂歌

著者から読者へ

277      274 256 239



海冥<sup>かいめい</sup>

太平洋戦争にかかわる十六の短篇

## 海のいくさ

### I

土のいくさと海のいくさがあった。

土のいくさのことは聞いていた。「麦と兵隊」ということばがある。あるいは、「泥と兵隊」。どちらも、高名な小説の題名だったが、子供はそんなことは知るはずがない。それで、ただのことばだった。ただの、土のいくさのことを言いあらわしたことばとしておぼえていた。

いちめんの黄色い麦畑のなかを兵隊が行軍して歩く。連想の基調の色彩は黄色で、だから、いちめんのコーリヤン畑でもよかった。土と植物の匂いに混じって、兵隊の汗臭い衣類の匂いがある。戎衣の匂いというものだ。それから機械油の匂いだ。これは機関銃に塗った油の匂いだろう。あるいは、腰にぶら下げた銃剣、ゴボウ剣の油の匂い。

しかし、連想は麦よりも圧倒的に泥だった。漕いでしなくつく泥の道、いや、道なき道を、泥んこになった兵隊の泥だらけの軍靴が動く。一步一步、ずぶずぶとそれは泥のなかに踏み込む。野砲のワダチがそこに沈み込む。馬が立ち往生する。指揮官が叱咤する。どなる。しかし、兵隊は黙々と歩く。

泥のなかを這うようにして動く。

くたびれていた。子供心にもそれはよく判った。そのころは子供でも遠足を「行軍」と称して、今ならばバスで一日がかりで行って帰って来るほどの距離をただ歩いた。歩くことだけが目的だったから、くたび果てた。ものが言えなくなるぐらいくたびれても、歩かないと帰りつかないのだから歩く。靴ずれもマメもつくった。それでも、歩いた。

そういうこともあつてか、泥のなかのくたびれはよく判った。からだで感じとられた。連想のなかで、自分でもくたびれていた。泥にもまみれている。雨のなか、つまり、泥のなかを歩かされたこともあつたのだ。先生が言った。皇軍の将兵は大陸で苦勞しているぞ。これしきの雨。子供も歩いた。泥にまみれて。

くたびれて、兵隊は泥のように眠る。夢は見ない。見たとしたら、故国の山河のなつかしい夢だ——と、そのころ先生が作文で書かせたがつていたようには連想は動いて行かなかつた。泥の眠りのなかに夢はなかつた。しかし、それでも、あつたとしたら——

泥の夢だろう。泥の海が滙てしなくつづく。それが夢のなかいっぱいにひろがる。そして、そのうち夢のワクを越えてからだのうちいっばいにひろがり、からだは泥でつまる。息がつまる。

そこで恐怖に馳られて大声をあげて眼をさまして母親をおどろかせた、というのではない。やはり、そこは眺めていた。ふしぎに三人称の夢じみていた。泥は、雨中の「行軍」の経験にかかわらず、遠かつた。

わたしは土のいくさの現場、いや、土のいくさのあった現場を見てはいない。大陸は夜行列車でかすめただけだ。大陸の涯ての半島の北の首都から大陸の首都めがけて週二回、夜行列車が走る。いや、かつきり二十四時間かかる汽車で、出発と到着は午後何時かの時刻だったが、途中のかつて土のいくさのあったとおぼしきあたり、そこでは深夜になっていた。寝台車の四人用の車室にはわたしひとりがポツネンといて、窓の外にひろがる闇に対していた。見ていると言うよりは対しているという感じのたたずまいでわたしはいたが、そのうち奥ゆきのあるたれ幕のようにわたしのまえにあったものが不意に白っぽくなった。光線のかげんかと思つたが、そこにぎやかに灯火のつらなりなどがあるはずがない。雪が積もつていたのだ。いや、そのうち、たれ幕が奥ゆきごとかすんだ。雪が降り始めたのだ。と言うより、私の孤独な夜行列車が雪が激しく降っている闇の空間のなかに突っ込んで行つたというわけだろう。窓の外の吹雪をぬくぬくと室内から眺めているほど安楽な境地はないというような話だったかコトワザだったか、西洋ダネのそういうのがあるが、人気のない車内はそれほどぬくぬくしさにみちていたわけではない。けつこう冷えていて、防寒用のぶあついコオトをわたしは引きかぶっていたが、それにしても、窓ガラスがたれ幕とわたしのあいだを隔てていて、そのうち雪の吹き降りがあまりに激しくなつて来たのだろう、何も見えなくなつた。闇というものは無ではなくてあれは見えるものなのだが、窓の外はそのときまるつきり無になつていた。

土のいくさが不意に海のいくさになっていた。土のいくさは泥のなかで停滞していたが、海のいくさは動いた。一路南へむかつて動き、そして、急に停滞した。

むかしむかし、島には七人の兄弟が住んでいました。お父さんとお母さんは死に、七人は七人だけでくらししていました。村の近くの大きなバナヤンの樹にこびとも住んでいました。

ある日、いつとう上のお兄さんが弟たちにむかつて言いました。みんなで畑へ行つて、ヤムイモを植えよう。そこで、いつとう下の弟だけを残して、みんなは畑へ行きました。いつとう下の弟は家でお兄さんたちのために食事の準備をすることになったのです。お兄さんたちは彼のために竹の笛をおいていきました。みんなが畑に出ているあいだ、彼をたのませようと思つたのです。

お兄さんたちが立ち去つたあと、いつとう下の弟は食事の準備を始めました。まず火をつけ、ヤムイモを火の上におきます。ヤムイモが焼き上つたところで、きれいにして、葉っぱの皿にのせました。それは畑からお兄さんたちが帰つて来たときにいつでも食べられるようにするためでした。

ヤムイモを焼いているあいだ、ときどき料理の手を休めては、笛を吹きました。バナヤンの樹のなかにいたこびとは笛の音を聞いて、音が好きになりました。やつて来て、少年に、ちよつと火をくれないか、と言いました。少年は答えました。いいよ、その大きな、燃えている枝を持つて行けよ。こびとは枝を取りましたが、少年はさらに焼き上つたヤムイモもやりました。それから、こびとは立ち去りました。

しかし、彼はやがてまた戻つて来て、また火をくれと頼みました。それでは、最初の枝はどうなつ

たかご存知ですか？ 彼は食べてしまったのです！ 彼は少年には火は消えてしまったと言いました。同じことを何度もしましたが、少年はそのたびに枝とヤムイモをやりました。あげくのはて、火はなくなつたし、ヤムイモももう家にはありませんでした。最後にやつて来たとき、こびとは少年の手から笛を奪い、バニヤンの樹に笛もろとも逃げて行きました。

小さな少年は大声で叫びました。畑にいたお兄さんたちは少年の叫びを聞いて、あわてて掘り棒を手になぎりしめたまま帰つて来ました。何が起つたんだねと家に帰りつくとすぐ彼らは訊ね、少年は火とヤムイモと笛に何が起つたかを答えました。お兄さんたちはみんなバニヤンの樹のところに馳けつけ、石オノで樹を伐り倒しました。こびとは笛を口にくわえてそこに坐っていました。そして、彼はお兄さんたちにむかつて言います。あんたらがオレを殺せないなら、オレのほうがあんたらを殺すね。それから、あんたらをみんな食つてしまう。笛はオレのものさ。このことばを聞いて、お兄さんたちはみんなひどく腹を立てました。彼らは弓矢を取りました。コン棒と槍もです。みんなして、まもなくこの醜い小さなこびとを殺しました。それから笛を取り返して、家に帰りました。

今日このごろ、きみが村に行くなら、村人は大地に横たわつているこびとを見せるでしょう。兄弟のほうも近くにむらがつています。もちろん、ほんとうの人間ではありません。みんな、石です。

「合格」ということばを聞いたとき、少年の全身はにわかに熱くなった。白いパンツ一枚で痩せた上半身を白衣の軍医の試験官のまえにさらけ出している気恥しさはその一語でたしかに消えた。熱く

なったからだに一本シンが入ったようにじんわりと力がみなぎっている。

からだ全体が太くなって、少年がいつも気にしている細い手足も太さが二倍にもなっていた。そんな感じで陸軍病院の長い板の廊下を代用ゴム底の草履でわざとペタペタ音をさせて歩いて出ると、そのまま、疎開先の伯母の家へは帰らないで学校へ行った。日曜日だったが、今川は学校近くの何んでも屋の長男だったから、休日でもしよつちゅう学校に来ていた。もつとも校庭でバツタリ出会ったところで、級友には誰ひとり受験のことは言っていないなかったから、今さらこちらから「合格」を吹聴することもなかった。どうせ、そのうち知れることだ。黙っていたほうがおくゆかしい感じだったが、そんな思惑より少年はただ背丈は同じながらだつきは彼の二倍も三倍もしっかりしている組随一のガキ大将のまえに黙って立っていたかった。からだが全身で「合格」という二文字になっていた。そういう感じで立ちふさがっていたかった。

彼の「志願」のことを知っているのは、担任の吉岡先生だけだった。彼には口止めをたのんでいたのだが、もちろん、彼は応募は少年の父親、母親、あるいは、少年が縁故疎開にひとり来ていている先の少年の伯父、伯母によつて許可されたものだと思われているだろう。願書には「保護者の同意」を求める欄があつて、そこには父親の名前を書きしるしたあとに印鑑が押してあつた。少年が自分で書き、同じ姓の伯父の印鑑を拝借して押したので。

今川は少年の細い手足と痩せたからだつきを見て、そんなからだで戦争に行けるかといつも嘲笑していた。いや、いつもではなかった。二人きりしていると、ガキ大将は案外心やさしいところを見せて、おまえも疎開で親もとを離れてたいへんやな、しつかりせよと兄貴のような口のきき方をした。そ

れが人数がひとりでもふえると、たちまち嘲笑となり悪罵となつてとめどがなかった。戦争に行けるかのあとは、だから、おまえら大都会の人間は駄目なんだということであつた。ガキ大将はいろいろ言つたが、要はそういうことだ。今川が生まれ育つた土地も田舎ではなくて地方都会だつたが、地方都会は大都会とくらべると決定的に田舎だ。それにその地方都会は「軍都」として知られた都会だつた。師団司令部があつて、陸軍の学校があつて、大きな陸軍病院があつた。少年が身体検査を受けて「合格」のおスミつきをもらったのもその木造の病院でだ。

今川の姿は学校のどこにも見えなかつた。用事ありげに歩きまわっているうちに木川田先生に出くわした。木川田先生も今川同様、少年は苦手だつた。くたびれた中年男の担任の吉岡先生とはちがつて、体操が得意で、まだかなり若かつた。人気もあつた。ひとつには彼がかつて召集されて戦争に行つていたことがあるからだろう。以前のこと、したがつてそのころの少年たちがこぞつて期待したように南方での海のいくさの体験者ではなかつたが、それでも、彼はとにかく戦争に行つていた先生なのだ。なみの先生とはそこでちがつた。

少年が彼を苦手だつたのは、彼も少年の細い手足と痩せたからだを嘲笑した人間だつたからだ。少年は彼の、からだを鍛えんと御奉公できんぞということばをそんなふうにとつていた。一度言われたことがあるきりだつたが、大陸での土のいくさの体験者は少年をじろりと見てからそう言つた。

木川田先生はあかい顔をしていて、酒に酔つているように見えた。実際、息にかすかにアルコールの匂いがした。少年が「合格」のことを彼に告げたのは、先生がそのかすかにアルコールの匂いのする息まじりに、先生はまた戦争に行くぞと言つたからだ。再度の赤紙が来たのだとか言つた。今度は

南方だ。帰れんな。芝居がかりに自分で念を押すようにつぶやいたのに上から先生のからだ全体におおいかぶせるように、ボクも行きますと少年は言った。たかぶつた声ではなかった。落ちついた声が出た。

「合格」は身体検査に関してだけだが、一週間後に行なわれる学科試験のほうには自信があった。身体検査が少年の気がかりの最大のものであったから、少年がもう、その国民学校を終えたばかりの少年たちを集めて飛行機の乗員を養成する学校に入った気になっていてもふしぎはなかった。もとは民間機の乗員を養成する目的のものであったのが、今は軍の学校のようになっていた。だから陸軍病院で身体検査も行なわれたのだが、そこを出ると予備の下士官にはなれた。

ボクも行きます、のあと少年は「合格」のことを彼に告げたが、彼はあかい顔をしたまま、かすかにアルコールの匂いのする息をはきながら、それはよかつたなと言ったきりであとは黙っていた。彼の表情は茫としてとらえどころがなかつたが、南の海のいくさの「戦友」どうしがそこに立っている少年にはその感じがたしかにあつた。おまえもがんばれ。しばらく経つてようやくことばを探し出したように先生は言った。ハイと少年は言った。そのハイで同じことばを彼も先生に言っていた。

おそらくアメリカ人しかはかないズボンがある。そう断言するように言うのは実際アメリカ人しかはいているのを見たことがないからだ。派手な原色のダンダラ縞のズボンである。一見バジャマのズボンのように見えるが、レッキとした外出用のズボンだ。小説家はいつもそんなズボンをはいてい

た。それで、会うたびに、あ、こいつ、アメリカ人だなとあらためてのように思ったのかも知れないが、小柄で、ズングリしている上にそういうズボンでは、いかにも兵隊がそのまま居ぬぎで小説家になつている感じだった。

外へ出るときには野球の帽子をよくかぶっていた。原色のダンダラ縞のズボンにその帽子と来ると、これはもう漫画に出て来るテキサスあたりのヤンキー田舎男の典型だろう。彼が彼のワイフと住むパリにはまつたくそぐわないが、パリ住まいはもつぱらワイフの趣味性ヘキのおかげと見えた。無骨な田舎男はえてしてこういう無邪気にぶつたり凝つたりする女性が好きになるものだが（これは逆もまた真だ）、きつすいのアメリカ女のくせにパリ女は無理だとしてもヨーロッパも少し田舎の阿姆斯特ダム女ぐらいには通用した。小説家がここ十何年のパリ住まいにもかかわらずほんのカタコト程度にしかできないフランス語も彼女はかなりうまくあやつつて話して、こういう女性にはつきものパーティを二人の住居の時代物の大きなアパート（建つてから確実に百年は経つていた）の大広間でしょっちゅう開いていた。大広間のこれもまた大きなフランス窓からは大きな寺院の建物が見えた。ノートル・ダム寺院だから、こちらままさしく時代物の建物だ。こちらのほうはもう数百年が経つてゐる。

パーティの客はおおむね夫妻の同国人で、彼らがほかの国の人間を連れて来る。わたしも誰かに連れられてそこへ行つた。日本の小説家というふれ込みである。ワイフは愛想よくあの何んとかいいう小説家の作品を読んだとか読まないとか言つた。そういう言い方にはわたしはアメリカやヨーロッパで慣れていたから、ミシマの名前を出した。彼女は曖昧にうなずいた。それともカワバタの名前を彼

女は言いたかったのか。二つの名前のうちどちらかを言えば、それで当たる。彼女の夫はただ酒を飲んでいた。そのうち、たいして面白くもないことに奇声を発して笑い始めた。キャツキャツと書けばそんなふうな音になる笑声で、眼鼻だちがくしゃくしゃとかたまつた感じの彼の顔はその笑声でたしかにおサルに見えないこともなかった。パリ在住のアメリカ文学研究家の若い日本女性（奇妙なとりあわせだが、現代世界、それくらいの奇妙さはいくらもある）にせがまれてパーティに連れて行つてやつたら、彼女はすぐそんなふうに彼のことを評した。いや、もうひとつのことも言つた。あの人、もう駄目ですよ。書くことがなくなつたみたい。

いくさのことばかり書いて来た男だつた。しかし、それは過去の彼自身も参加した南の海でのいくさだつた。同じ南方でもベトナムでのいくさのことなら、そのころそのパーティに来ていた彼の同国人の若い男女にとつては切実な問題だつた。たいていが反対していた。徴兵をキヒしてパリに「政治亡命」をきめ込んでいたのもいたようだ。彼らは原色のダンダラ縞のズボンなどはいていなかった。野球の帽子もかぶつてはいない。そして、その原色のダンダラ縞の小説家は過去のいくさのことについてはいくらでも書いて来たが、現在のいくさについては何ごとも意思表示をしようとしなかつた。故国では、小説家や詩人の何人かが反対の声をあげていた。なかに彼のライバルともくされて、いや、かつてはたしかにそうであつたMがいた。順序はこうなる。いくさの体験を書いた小説をひつさげて世に出たのは彼のほうが二年早かつたから、Mが同じように出て来たときには、Mが彼のライバルだつたというわけだ。そのうちMの名声、評価ともに彼をぬいて、Mのライバルが彼だということになつた。そして、そのうち、彼はもうMのライバルでも何んでもなくなつていた。Mには、いつ

もスキヤンダルじみた問題ばかり起こしていたが、思想がある。原色のダンダラ縞の小説家は——たぶん、体験しかなかった。体験は腐蝕する。彼と同国人の若い批評家の誰かがそんなふうに書いていたことをわたしは読んだことがある。すると、思想とは何か。体験の防腐剤か。

彼の戦場だった南の海の孤島は、われわれにとつては、まず飢えの島だった。それから、ジャングル、苦戦。三つともすでに国民に知られていた。わたしも知っていた。不安であつた。海のいくさはずでにそのあたりで陰惨だった。

日本兵の死体の骨でペーパー・ナイフをつくって奴らは使っているのだとか新聞に書いてあつた。真偽のたしかめようはないが、あながちウソでないと思うのは、ちょうど原色のダンダラ縞の小説家に会つていたころ、日本兵のシャレコウベを机の上において手紙か何かを書いているアメリカ兵の写真を見たことがあるからだ。そういう写真がいくさのころアメリカの地方紙にそんなふうな解説つきで出ていたのだ。

彼の話も陰惨なものだった。小説には遠慮したのかたいして出ていなかったが、アメリカ軍が負傷兵を遺棄して後退すると、日本軍はこれ見よがしに彼をハリツケにして殺す（あれはキリストの「難」）そっくりの光景だったと言つた。日本兵にはクリスチャンが多いのかねと訊ねた。翌日は同じように戦場に遺棄された日本軍の負傷兵のほうに殺される番だ。アメリカ軍の戦車が生きたのをそのまま敷き殺した。いくさがすんでから田舎へ帰つてその話をする、誰も信じなかつた。

「アカ」だと言つたやつもいる。バクチをして酒のみ、ああ、それから投げ矢だ。投げ矢は昔から好きで、パリの時代物の書齋の壁に、投げ矢のマトの大きな板をかけていた。仕事に倦むと、そのマ

ト板めがけて、彼はしきりに投げ矢を投げた。仕事に倦むとは美辞レイ句で、書けなくなるとのことだ。そして、そのころ彼はもう実際書けなくなっていたから、しょっちゅう投げ矢を投げた。

その投げ矢で、彼は生命を助かったことがあった。日本軍の斬り込み隊が夜襲して来たとき、斬り込み隊の隊長らしいのが日本刀で彼の横手の戦友の首を斬って、返す刀で彼を斬ろうとしたときに彼はナイフを投げ矢のように隊長の胸めがけて投げた。それで彼は助かったというのだが、もちろん、武勇談につきものの誇張はあるかも知れない。ただ、似たようなことはあったのだろう。わたしはじめて彼の、いや、彼のワイフのパーティに立ちあらわれたとき、あらかじめわたしという日本の小説家が来ると聞いていた彼は終日落ちつかなかった。同業者の小説家が来るといって落ちつかなかったのではない。日本人が来るといって落ちつかないのだ。それでパーティの時刻が来るまで終日酒ばかりのんでいた。少し親しくなったころ、彼はいくさの体験のことを書いた小説の一冊を「はじめてオレを射たなかった日本人に」という献辞つきでくれた。これも誇張だろう。感傷かも知れない。しかし、いくさの体験の持続にはその種の誇張と感傷はえてしてつきものだ。二つが腐蝕を早めるとしてもである。そして、いくさそのものは、そんな誇張や感傷はいつでも超えている。

しかし、わたしが彼のことによくおぼえているのは、そんな投げ矢の武勇談やら誇張と感傷の献辞ではなくて、エッフェル塔のついでで彼が会った彼の同国人の親子連れの話だ。話そのものより彼がその話をしたときの表情やら身ぶりやらが、わたしのからだのひとすみひつかかって来ている。まるでからだのなかのどこかに衣紋かけがあつて、そこに今にもずり落ちそうになりながら辛うじてひつかかっている。それも洗濯屋が洗濯に頼んだズボンなどをひっかけて持つて来る頼りなげな針金

製の衣紋かけだ。そこにひっかかっている彼の話とそのときの表情、身ぶりが全体で彼の記憶になっていた。

エツフェル塔のつぺんの展望台にひと眼でアメリカの田舎から来たと知れる親子連れがいた。原色のダンダラ縞のズボンをはいて野球の帽子をかぶっていたかどうかそこまで訊かなかつたが、わたしのからだの衣紋かけにひっかかっていた記憶では五十がらみの父親のほうはダンダラ縞のズボンをはき、十歳ほどの年の男の子は野球の帽子をかぶっていた。その父親は子供にむかつて、ここがパリだよ、息子よ、ここがパリだと懸命に言っていたというのだ。アメリカ人には自分のぞくする西洋の本場のヨーロッパをひと眼見たいという気持がある。ロンドン、パリとなると、本場ちゅうの本場だ。懸命にこれまで働いて、彼らのいうところの「正直お金」オネスト・マネーを貯めて、やっと息子を連れてその本場までやって来れるぐらいになった。見てくれ、このパリを、は、そのまま、見てくれ、このオヤジを、ということになっていたとしてもふしぎはない。息子はそっぽをむいていた。知らん顔をしていた。父親は泣き出さんばかりになっていたらと投げ矢の名人の小説家はわたしに言った。どういいうわけからか、彼も泣き出さんばかりの表情と口調でそれだけのことを言った。そのうち、そいつはどうしたと思う？息子を殴った。殴られた息子は？わたしは訊ね返した。途方もなく意外なことを訊かれたようにわたしをまじまじと見たが、一度、同じ表情を彼はしたことがあった。それはそのいくさの孤島で彼らはいくさをしているあいだ、もとからいた孤島の住民はどこでどうしていたか訊いたときだ。そんな表情がしばらくあって、どうしていたかね。見たことはなかったという答がゆつくりつづいた。

エツフェル塔の親子連れの話から十年ほどが経って、新幹線の車中でアメリカの週刊誌を眺めてい

たら、見おぼえのある彼の顔写真が出ていた。過去が突然顔を出した感じで、どうしてまた、と思つたら、彼が死んだというのだ。とつきに自殺を思つたが、原色のダンダラ縞のズボンが自殺をするはずがない。また、自殺してはならないものだ。死因は急性のガンか何かだった。記事には「過去の人が真実過去の人になつた」とあつた。なるほど、うまいことを言う。眼を上げると、窓の外に海のひろがりが見えた。どんよりと曇つた冬の午後的大海だ。さむぎむとしていうより、何より生気がない。海が腐蝕している。

## II

ほんの五時間まえまでグエンは逃げるつもりはなかつたのだ。逃げるという人も近所にいたが、生まれ故郷のこの町を去つてどこへ行こうというのか。グエンの兄は四人とも町から出て行つていたが、二人は兵隊にとられて出て行つたのだ。二人は仕事を求めて南の首都にまで行つた。ひとりの兄からはじめ絵ハガキが来たが、そのうち、二人ともまるつきり音信不通になつた。兵隊にとられた二人の兄も同じだ。こちらのほうは生きているのか死んでいるのかもよく判らなかつた。それでも四人がこのいくさがすんだら家に帰つて来ると母親は信じていて、その信念は何ごとが起こつてもゆらぎがないように見えた。姉がひとりいたが、アメリカ兵相手のバーで働いているうちに兵隊が悪ふぎけをして弾を射つたのに運わるくあつて死んだ。しかし、息子はみんな帰つて来ると母親は確信をこめて言い、信じていた。

父親は早く死んでいなかったから、母ひとり子ひとりの家庭だ。母親はあちこちの商店の下働きを

したりして辛うじて生計費を得ていた。グエンも下働きに出ていた。そのうち、靴みがぎになった。アメリカの兵隊相手の靴みがぎだ。たまにベトナムの政府軍の兵隊も来たが、やはり、アメリカの兵隊のほうがよかった。政府軍の兵隊のなかには靴をみがかせておいてから金を払わないのまでいた。ピストルでおどしたりするのだ。そんなもののひとりに、あとでグエンは仲間といっしょに大きな石を背後から首のあたりにぶちあててやったことがある。首の皮膚が破れて血が噴き出るのをあわててハシカチでおさえかかったのを、グエンは横手で何くわぬ顔で見ている。

ほんとうに逃げるつもりはなかったのだ。グエンばかりではない。住民の大半がそうだった。「彼ら」はたしかに町の郊外にまで達していたが、それはたえ間なくつづく砲声やら機関銃の音で誰にも判ったが、まさか、この北部での政府軍の最大の根拠地がやられるとは思っていなかったにちがいない。それに、昨日、一昨日とかえって砲声、銃声はずまっていた。それが五時間まえから大騒ぎになったのは、怯えた眼をした人々が次々に町へ入って来たからだ。避難民である。それからすぐ街に住むアメリカ人たちが総引き揚げを始めた。噂はまたたくまに町中に伝わった。アメリカ人ばかりか政府軍までが引き揚げを始めていた。ヘリコプターが何機も飛んで来た。近くの飛行場へこのあいだから切れ目なしに降りては舞い上っていた救出用の飛行機の数もにわかになふえた。しかし、大半はハシケで逃れた。ハシケで沖合いに待つ船にまで行く。と言うのはやさしいが波止場のあたり、もう何万という避難民が怯えた眼をしてひしめきあっていて、見物に来た野次馬もすぐ怯えた眼になった。「彼ら」が住民をみな殺しにするというような噂が立ったというのではない。しかし、まず、アメリカに關係のある、政府に關係のある人間が逃げれば、次はその關係のある人に關係あるのが逃げる番

だ。さらにその次は、というぐあいに関係は連鎖反応をくりひろげる。反応は渦巻になっていた。渦巻から外れるのはこわかった。渦巻はひとつの方向を持つていた。海へ。――

グエンは母親の手をひいて走った。彼が行くのだと言ったとき、母親はたいしてことばを返さなかった。母親もそのときすでに渦巻のなかに巻き込まれていたのだろう。小さな包みをつくつて二人で出た。

しかし、グエンは母親と途中ではぐれてしまった。探そうとしたが、この途方もない人混みのなかでは不可能事だった。いや、そのまえに彼は前へ前へと押し出されて行つた。海へ、ただ押し出された。

ハシケに泳ぎながらとりすがろうとする手がいくつもあつた。その手を外せ。ハシケのまんまかにいた兵隊がどなつた。グエンは何か言おうとしたが声にならなかつた。下手なことを言うと、彼が海に蹴落されるだろう。彼はそばの何人かといっしょに（大人も子供もいた）手を外しにかかつた。近くでハシケが人の積みすぎで沈んだものと見えた。だから、手はいくつも舷側にかかつて来た。兵隊は自動小銃をかまえ、グエンたちは必死に手を外した。そのままハシケは沖合へ出て行つた。そこはすでに海だった。

## 船

唐突に港へ行ってみないかと国井は妻と娘の藤子に言っていた。暑い休日の午後のことだ。まったく今年の夏は暑くて、国井の家のチツポケな冷房装置ではどうにもききようがない。それでさつきから窓を開けているのだが、さわやかに一陣の風が吹き入っているというのではない。ただ生なまあたたかい空気が移動する。そんな感じだ。そんな感じでした。

港でなら、まだ少しは風らしい風が吹いていることだろう。二十年前、港を発つた日も同じように真夏の暑い日だった。その暑い日の午後、国井たちを乗せた船は出て行ったのだが、船がかなり沖合に出た、曳き船がいつせいに汽笛を鳴らせて走り去ったあと自力で走り出すとすぐ一陣の強風が吹きつけて来た。それはまるで、まだ立ち去りがたく波止場に立っているにちがいない見送り人と国井たち船客のあいだの未練の一切がっさいを一挙に吹き払って行くような激しい吹き方の風で、その風の吹き方を国井はまだよくおぼえていた。見送り人の姿はもう識別できなかつたが、その港の附属物のようにして有名な海岸ぞいのホテルの古風な姿はよく見えた。ただ、それはもう自分とはまったくかわりのない外国の風景の一点景物として見えていた。

「沢寺酒店」と下手な書体で印刷したウチワを手にした妻の良子が、ものうげに、どうして、という表情で国井をちよつと見た。船を見たいんだと国井は言った。船？ 良子と藤子が二人してケゲンな

顔になるのを（ひとりには円顔、ひとりには細面というぐあい）二人の容貌はかなりくいちがつていたが、そこは、やはり、親娘だ、ケゲンな顔をするとおたがいがそっくりに見えた）上からおおいかぶせるようにして国井はつづけていた。オレがアメリカに行つた船だよ。キミが見送りに来た船だ。それだけ良子に言つてから国井は藤子にむきなおつた。キミはこの人のおなかのなかにいた。

まだ、あの船走っているんですかと良子が気のない口調で口を出した。走っていないな。ホテルの前に公園があつたな。その公園の栈橋につながれてユースホステルになつている。あ、あれね、と今度は藤子が口を出した。わたし、見たことある。その一言でぐったりしていたのがにわかに元気を回復した感じだつた。そう、お父さん、あの船に乗つてアメリカへ行つたの。藤子は元氣よくつづけて、そのまま、どうして飛行機で行かなかつたのという当然の質問になる。留学生は——アメリカ政府から奨学資金を貰う留学生は船で行くことになつていたんだよ。ステキね。ことば半ばで藤子がさえぎつた。ステキよ、船で行くなんて。彼女も去年の夏、最初の海外旅行に出かけていた。もちろん、行き帰りと飛行機の旅だ。行先はヨーロッパ。アメリカではない。ヨーロッパのほうがアメリカ行より安上りだし、若い女性には人気があるという話だ。パリよりロンドンのほうがよかつた。人間が親切みたい。そう言つていた。

結局、藤子が国井について来ることになつた。お父様のお船を見に行きます。いつもは使わない「お父様」ということばを藤子使つてヒョウキンに首をすくめてみせた。そう言えば、国井もさつきからいつもは使わない、いや、かつて良子が国井を見送りに来たころにはいつも使つていた「キミ」ということばを使つていた。とにかく暑いわ。外へ出たほうがよいわ。港なら涼しいわ、きつと。「お父様」

のバカ丁寧な口調のあとはいつものセカセカした早口に戻って藤子はそれだけ矢つぎ早に言った。首筋にべつとりと汗が滲んでいる。かたちのよい、細い長い首が、汗でぶざまに濡れていた。お船を見たあと、何かおごつて下さるのでしよう。わたし、中華料理より西洋料理のほうがいい。彼はうなずいていた。波止場の入口のところにスカンジナビア料理のうまい店がある。キミも来ないか。国井はもう一度良子を誘つたが、かぶりをふつた。良子はいったんこうと決めたら、心をひるがえさない女だった。ニコニコしながら、親娘のデイトをたのしんでいらつしやいと素気なく言った。

キミが見送りに来たとき、黄色い帽子をかぶつた女がいなかったかねと、玄関を出がけに国井はまた唐突に良子に訊ねていた。そんなことおぼえていないと言つてから、良子はまた、どうして、という表情になつた。

甘酸っぱい匂いがした。いい匂いだが、少し刺激が強すぎる。キミは香水をつけているのかとあらたまつたような言い方をしたのも、娘だとは言いながら若い女性の体臭のままで照れてみせたのか。藤子がかぶりをふつた。まるで小さな女の子がイヤイヤするような方だった。久しぶりに父親と二人きりで遠出して来て、彼女も照れてしまっているのかも知れない。何んとしてもぎこちなくて、ぎこちなさを押しかくすためには子供の昔に立ち還るのが手つとり早い方策であるのかも知れない。波止場のベンチに並んで坐つて両脚をブランブランふつてみせた。もちろん、子供の脚でないからすぐ地べたにつかえる。それを無理してふつた。ページュのスカートの下から長い脚がまつすぐに伸び

ている。少し太すぎる感じだが、長さが長いのでさして気にならない。焦茶色のかっこうのよい靴をはいていた。ヨーロッパで買って来たのだ。

大きな船ね。

藤子が、海ひとつの間隔をおいて見える船を見ながら言った。上部を白、下部の船体のところをミドリというぐあいにしきって、今はユースホテルに化し去った船は浮かんでいた。国井は相槌を打つようにして言った。

たしか一万一千噸あったな。

もちろん、そんな数字は藤子には何の感興も呼びさまさないだろう。それでも国井は白とミドリのユースホテルの隣りの、船体がまだらに赤錆びた貨物船を指して、これは八千噸ぐらいだなと言った。こちらの白ぬりの客船は六千噸ほどだ。あれはこの船？ ソビエトの船だよ。ここからナホトカまで一昼夜ほどで行く。真赤にぬった煙突に鎌とハンマーの国のしるしがついていた。

なんでそんなこと知ってらっしゃるの。何が噸だとか。お父さんの仕事と何んの関係もないんでしょう。

藤子はまるでとがめだてするような口のきき方をした。たしかに食品会社の調査部長という仕事と船の噸数は何んの関係もないだろう。国井は苦笑しながら、男の子というものはそんなことに興味をもつもんだよと言った。

そうね。

藤子は短かく言った。それから考え込む表情になった。国井はつけ加えた。

それと戦争のときの子供だろう、オレなんかは。それで軍艦やら船やら飛行機やらのことはよく知っている。

「戦争」というただけしいものが誘発したのか、これもへいぜい使わない「オレ」ということばが自然に口をついて出ていた。「オレ」がさつきからの「キミ」と一対になっていて、「オレ」が「キミ」に対して、「キミ」が「オレ」にむかいあっている。藤子が恋人というのではなかったが、さして年のちがわない若いイトコにまだ十分に若いイトコが対している。

アメリカの飛行機の型なんかよく知っていた。おぼえさせられたもんだからな。

会社でも、同僚の男たちのあいだでそんな話題が出るときがある。誰かが図まで描いて、キミ、これ、判るかね、グラマンだよ、と自慢顔に言ってみたりする。そんなとき、みんなはふしぎに生気にみちた顔になった。グラマンに追いかけられた。そういう話も出る。そのとき、パイロットの顔が見えた。まだ若い男だった。

大きな船だとは言ったが、きれいな船だとは藤子は言わなかった。全体がどこか薄汚れていた。いかにもくたびれている感じであった。ミドリの船体がブルーの海面と接する吃水線のあたり赤錆びが目立つ。昔はこれよりきれいだったにちがいないと思う。国井たちが乗り込んだ二十年昔のことでない。さらに昔、戦争のまえ、「太平洋の女王」と言われてこの港とアメリカのあいだを行き来していたころのことだ。国井たちが乗ったときで船齢がすでに二十有年ということだったから、今からならかれこれもう五十年昔ということになるのか。半世紀近くも昔の話だ。ただそのころでも、この港からサンフランシスコに至る、航海のファイナールは湾口にかかる金門橋をくぐって入港するという、

いわば表街道の、この船よりひとまわり大きい一群の「太平洋の女王」たちとはちがつて、こちらのほうは「女王」は「女王」でも、シアトルというアメリカ合州国北部の地方都市のたいして美しくもない港に入る裏街道の「女王」だった。かたちはそれなりにととのつていたが、優美ではなかった。ヨーロッパの小王国の「女王」というところだろう。そういう小王国の宮廷には百姓女のように実直な顔つきをした「女王」がいるものだが、太平洋裏街道の「女王」にもそういう感じはあった。しかし、もと適切なことを言えば、中年すぎの実直な勤め人が自宅と会社のあいだを何十年にわたって往復している。往復しているあいだにいろんなことがあった。戦争が起こり、終わった。

あの船はね、病院船だった。それで残った。

他の船はみんな沈んだんですねと藤子は当然のことにようにして国井のことばにつづけた。国井はうなずいてから、空襲や魚雷にやられてねと噛んでふくめるような口調でつけ加えた。同時にひとつのことばの記憶がよみがえって来た。それは「商売」ということばだった。最後尾の甲板で海を眺めているときに、甲板の直下の下級船員の居住区からのつそり姿を現わした甲板員の男が言った。甲板員は昔のことばで言えば水夫だが、頭髮に白いものが目立ったその男は、オレはタダの甲板員だと訊ねもしないことを言った。年かっこうから言えば甲板長というところだったかも知れないのでそんなふうに言ったのかも知れない。カプクのあるからだをしているくせにどことなく貧相で、たしかにタダの甲板員のふぜいがあった。それを身につけていた。

そのころは太平洋で泳ぎましたよと言う船員が、まだ何人も船に乗っていた時代だ。その船でも何人かから話を聞いていたが、タダの甲板員の話だけが妙に記憶に残っている。それは、やはり、その

「商売」ウンヌンのことばのせいだろう。学生さんかね、アメリカさんへ勉強しに行くんかねと甲板に突き出た小さな出口から出て来るとすぐそう気さくに話しかけて来た。その気さくさが人見知りをするたちの国井の気持をときほぐして、オジさんもここで泳いだ口ですかと気軽な口のきき方をさせた。そう言いながら、国井はアゴですでに暗くなり始めた海を指した。ちよつと戸迷つたように海を見てから、その夕ダの甲板員だという男は、まあね、と軽くうなずいた。

二度あると言っていた。一度目は空襲。二度目は、潜水艦の魚雷でやられた。二度目はこの近くの海でだったと彼もアゴでしゃくり上げるようにして暗い海を指した。一度目は数時間で引き揚げられたが、二度目は数日かかった。いや、すでにそのときは絶望だった。板ぎれにすがつて半ば人事不省のまま漂流しているところに、偶然潜水艦が通りあわせたのである。一度目はあらかた生きのびたが、二度目はあらかた死んでいた。あらかたというのは、どちらも彼の同僚の船員のことだ。乗せていた兵隊さんも同じことでしたやろなと、男はふとつけたしを思いついたように大阪弁のおいすることばで言った。

そのとき自分が何を言ったのか、国井は記憶していない。たぶん、たいへんでしたなというようなお座なりな受けこたえをしていたのでないかと思う。国井が今さらのようにそう思うのは、男が彼の受け答えを引き継ぐようにして言ったことばがぐいとからだを押してきたからだ。商売ですんで、しようありませんやないか。男はそう言うっていた。さらに大阪弁が強く出ていて、全体の口調はねばつこかった。吐きすてるように言ったのではない。ねばつこくからだにまとわりついて来る。そんな感じで彼はそれだけのことばを言った。

「戦争商売」というようなありきたりのものではない。そんなありきたりのものなら、彼がその自分の「商売」で南の海の涯てまで運んで行くとした兵隊のなかの高級軍人にふさわしいことばではあつても、彼のようなタダの甲板員にとつてのことばではない。もつと確実にちがった何ものかだつた。あたかも平時がそのことばで戦時のなかに強引に割り込んだ感じだ。それも峻烈に一本の剣をさし入れたというのではない。もつとねばつこくひろがりのあるものを、そのねばつこさそのものの力で突き入れていた。しかも、そのねばつこさの果てで人が死んでいる。あらかた死んでしまっている。それじゃあ学生はん、と彼はもう純粹の大阪弁になっていた。ようアメリカはんで勉強しなはれや。学生はんは勉強するのが商売、こちらは船を動かすのが商売。それだけ捨てゼリフのようにして言つてから、タダの甲板員はさつきのつそり立ち現われて来た居住区の出口に姿を消した。その小さな出口から彼らのねぐらにまでは急傾斜の階段が一気に降下していて、上からのぞくとまるで深海の底まで降りて行くように見えた。そこらあたりのことは、昼間ひまにまかせてうろつき歩いているあいだに国井はよく見ておいていた。

海は厚ぼつたい暗がりのなかでもうすっかり黒くなつていた。足もとの黒色のなかで白い波が砕け散るのがよく見えたが、それで足もとが崩れかかつてそこに吸い込まれて行くような感覚をもつたわけではない。もつとストーンと足もとが切れていた。平時がそこでストーンと切れて戦時につながっていた。黒い海がそんなふうに見えた。足もとがストーンと切れて黒い海にそのままつながっているのだ。

どこにお父さんの船室はあったんですか、あそこですかと藤子は子供のような訊ね方をした。そんなふうな訊ね方で、生まれるまえはわたしはどこにいたんですかと訊ねたりして良子を困らせたのもつい昨日のことだったような気がする。あのととき五、六歳で幼稚園に通っていたのが、もう大学の二年生になつてゐる。あの大きな四角い窓のあるところですかと言いながら藤子は細い、長い腕を前方に突き出すように伸ばして船を指した。むき出しの肩のところに小さなホクロがひとつついてゐる。子供のときからあつて藤子はそのときから気にしていたが、こういうホクロは大きくなつたら美人になるしるしだよと国井はいつも慰め顔に言つていた。

ちがうねと国井は大声を出した。あれは一等船室だ。オレたちは三等船客だったんだよ。だから、そのずつと下の円窓のあるあたりだ。あんな小さな窓、と藤子はおどろいた表情になつてゐた。船底みたいなところじゃないですか。藤子はマユをひそめた。まるでそんなところにいた国井がわるいみたいだった。

たしかに狭い船室だった。そこに三人が押し込められていた。あい客は日銀の栗田と大化織会社の佐川。国井も自分の会社の名前を言つたが、つぶれかかった小さな教科書出版社の名前など二人は知るはずがない。判つたような顔をしていただけ、正直言つて二人とも知らなかつたと、気のいい佐川が親しくなつてから言つた。狭い船室だったが、それでもそのころ良子といつしよに暮らしていた三畳ひと間のアパートから見ればまさに天国だった。そのベニヤ板ばりのひと間で良子は藤子を身ごもつたのだが、もと工場だったのをベニヤ板で仕切つてアパートに仕立てたもので、床は土のままだった。ドブネズミが何匹か住みついていて、どこかの部屋で悲鳴が上ると、それが次々と伝播して行く。ネ

ズミがベニヤ板の壁が土と接触するあたりに出来たすき間をうまいことくぐり抜けて部屋を移動して行くのだ。アメリカを見たいということもあった。しかし、結局のところ、そのベニヤ板のアパート暮らしから脱れ出たかったのだ。私大の文学部を出て、新聞社やら大出版社やらを受けてすべて駄目だったということになると、あとはつぶれかかった小さな教科書出版社に何とか伝手を求めて入り込むよりほかにない。で、入った。入ってそこで営業部にいた良子と知り合って結婚したのだが、共かせぎをやつてのけられるほど会社は大きくもなければ開けてもいなかったから、良子は会社をやめた。仕事がなかった時代の話だ。懸命に職さがしをしたが、結局、小さな事務所の臨時の経理の手伝いぐらいしか仕事はなかった。それもたまさかのことだ。アメリカ政府の月づきの給費が魅力だった。留学先の大学が所在する地域によつてちがいはあるが、百五十ドルもらえらるゝとして、百ドルで暮らして五十ドル日本に送金するとすれば、休職中の給料を半額もらえればなんとかやつていける。いや、日本で稼いでいるときよりも多いくらいだ。それに国井は教科書とテストの売り込みにあちこちの高校やら中学やらをまわり歩いて、卑屈に教師にとり入る生活にイヤ気がさしていた。教師ほど助平な人間はないとはよく世の中で言っていることだが、国井は教科書会社五年の勤めのあとでつくづくそう思っていた。助平で、ケチで、みみっちい。そして、その三つを、教師にとり入ろうとする彼も共有していた。アメリカへ留学して何んとかハクをつける。それで転職する。それもいかにみみっちい夢だ。その夢に国井は賭けた。生来の語学好きで英語はかなりよくできた。学生時代、アメリカ人とも下手な会話をすることがある。会社もつぶれかかった小さな会社とはいえ、教科書を出している会社だ。アメリカはかえつてそういうのに弱い国だと昔のアメリカ人のつきあいから彼は考えていた。

その確信のようなものがかえって自信をあたえたのかも知れない、たいへんな難関とこのころ言われた留学生の試験に通つて、それで、船に乗つた。

彼のほかほかはい大企業や官庁の人間だつた。そうでなかつたら大学の助手や大学院の学生だつたが、彼ほどではないにしても、まだまだ日本が貧しかったころのことだ、「グレイプフルーツ」というのがメニューに書いてあつた、出されたその果物を見て、それら「選民」<sup>エリート</sup>たちはこれはブドウじゃない、ミカンじゃないかといちように思つた。あとでみんながそう白状した。

国井がユースホステルになつた船を見ながら藤子にそんな話をする、アラ、みんな、英語ができなかつたのねと声を立てて愉快そうに笑つた。高志には考えられないことだろうと国井は彼女の笑い声をさえぎるようにして言う。高志は藤子より三歳下の高校二年生の息子だが、グレイプフルーツが大の好物だつた。三個を一度に食べてしまつたりする。これ、高いのよと良子が言つてもかまわず食べて、からだにはかえられませんとおどけた口をきいた。いつときぐれかかつたこともあつたが今は立ちなおつて、サッカー部のレギュラーをやつていてからだも大きければ、氣立てもよかつた。藤子とは仲がよくて、彼女は、いつも、氣はやさしくて力もちの高志くん、というぐあいに呼んでいた。二人ともずばぬけてできのよい子供だとは思わなかつたが、それでも二人ともまともな子供だつた。国井はときどき高志を連れて食事をするときがあつた。男どうしの会話という感じで、高志はよくしゃべつた。学校のこと、友人のこと、食べながらよくしゃべつた。しゃべりながら、よく食べた。そういう男どうしの会話のなかで高志には打ち明けたが、良子にも藤子にも言つていないことがいくつかあつて、そのひとつは船ではじめて国井が西洋式の便器を使わなければならなくなつたということだ。

はじめ、どうしても出なかった。五日経って、もうこれ以上耐えられないところまでお腹がはったあげくによく出た。そんな話をしてから、オイ、おまえ、お母さんにも藤子にも言うんじゃないぞと国井は生マジメな顔で言った。ウンと高志はうなずき、これは一種の男どうしの默契のようなものだなと国井はちよつとそんな感傷的な、たかぶつたことを思った。

亡霊の船のことを語ったのも高志に対してだけだった。船で太平洋を航海して行くと、亡霊の船が立ちあらわれる。ふしぎに巨大な船で、灯火もきらびやかについている。日本人にしか見えないのだと言った。亡霊はたいてい日本人だからね。戦争のときやられた人だ。国井が言うと、高志は、太平洋は日本の船の墓場なんだろうと分別くさいことを言った。船の墓場じゃない、船に乗っていた人間の墓場だ。国井はすぐそうことばを返したが、ふしぎに焦らだった口調になっていた。何んに焦らだっているのか判らないままに口調がそんなふうに出ていて、それで余計焦らだっていた。お父さん、どうしたの、と高志がびつくりしたふうにやさしくいたわるように訊ねた。どうもしないよ。国井はテーブルの上のビールのコップを取り上げて口もとにやりながら短かく言った。

べつにそれで話の腰を折られて河本のことを高志に話さなかったのではない。どうにもそれは話しようがなかった。

亡霊の船の荒トウ無ケイの話をしたのは河本だった。河本も国井の留学生仲間と同じ船に乗って行ったのだが、小柄で目立たぬ男であった。中堅どころの造船会社の技師だとか言っていた。同じ船

に乗っていても通りがかりにちよつと会話を交すぐらいのことで、どうして彼があのとときあんな話を突然やり出したのか。ただ話相手が欲しかっただけのことだろう。話は默契にかかわっていた。いくさにもかかわっていた。船、いや、船に乗っていた人間の墓場にもかかわっている。

誰かの誕生日のパーティか何かあつた夜のことだ。くだらぬパーティを途中で脱け出して、つい二日前夕ダの甲板員と会話を交した最後尾の甲板に国井は行つた。酔いざましのつもりだったがたいして酔つてもいなかつたことは、吹きつける風が冷たすぎることですぐ判つた。それで船室へ取つて返そうとしたところに河本が彼のあとを追うようにしてやつて来たのだ。彼もたいして酔つていないようだった。まつたくの素面しらふでは決してなかつたが、酔つたまぎれに話をしたのではなかつた。酒が話したのではない。彼が話した。

まず、亡霊の船の話をした。その話をして、今夜あたり、それが出て来ると自分は信じているのだと言つた。どうしてか。彼は昼間ブリッジへ行つて天測器で位置を測っている二等航海士と話をして船の位置をたしかめて来ていた。それによると、今夜この時刻あたり、兄が沈んだところに船はさしかかる。兄も船に乗っていたんです。商船学校を出たばかりの新米の航海士でね。兄の船もその一部だつた輸送船団がそこで空襲と魚雷の双方にやられてほとんど全滅する。その話はあとで生き残りから聞いた。もちろん、兄のこまかな最後のさまではない。兄の船はほとんど轟沈こうせうだつた。水柱が上つたかと思うと、まつ二つに船体が割れた。沈むのに十分とかからなかつた。魚雷が何本か集中してあつたのだらうと、僚船に乗っていた生き残りが言つていた。

河本はその八歳ちがいの兄を尊敬していた。子供というものは、誰か無条件に尊敬する人がいるも

のですよ。そうちよつと弁解がましく言ったが、河本にとつてその兄がそれだった。小さいときから兄の真似をして暮っていた。兄は海が好きだったから、彼も好きになった。船も同じように好きになった。兄は商船学校に入った。彼もあとを追いかかったが、あいにく近視だった。おまえは船をつくるほうにまわれと兄は言った。これは遺言だとも言った。彼はうなずいた。

亡霊の船が出て来たら、兄さんのボダイをとむらうわけですなと国井は黒い海のひろがり眼をやりながら大声で言った。風が強くて、大声を出さないととうてい聞こえなかった。河本もさつきから大声をはり上げて話していた。まるで、二人でどなりあいをしているみたいだった。ちがうね。河本は大声で、その大声にふざわしい乱暴な口調で言った。もうこれでおしまいにしたい。ケリをつけた。そうつぶづけて言った。もう戦争の影をひきずるのも、兄の影をひきずるのも、これかぎりでごめんだ。ひきつったような声になっていた。

兄の影の下でずっと生きて来たという意味のことをそのひきつった声でくどくどと言っていた。大声でくどくど言うことはできない。自然声は小さくなつていて、それではとぎれとぎれにしか聞こえない。それでも判ったことは、河本がそれこそ兄のボダイをとむらうために遺言をまもつて大学は造船科へ行き、造船技師になったということだ。それはいい。それでたしかに兄の霊はやすらぐだろう。しかし、彼自身はどうなるのか。それから話は波止場の見送り人のなかの黄色い帽子をかぶった女性のことになっていた。あなたは見ませんでしたか。気がつきませんでしたか。河本は狂人のようにくり返した。それとも、風のせいで声かときれとぎれになつてかえつてそだけ強調されてそんなふうな感じをあたえるものになつていたのかも知れない。あいつはわたしの妻です、女房です。しこ

うして——あとから考えてそんな古風なことを彼が言ったはずはないと思うのだが、国井の耳にはたしかにそうひびいた。しこうして兄の昔の恋人……だった女……。

彼より三つ年上だとか言っていた。兄の戦死後あれこれ世話しているうちに彼の恋人になり妻になった。またしても、兄の影だろう。二言目には、兄の名前を出して、——さんが、——さんがと言った。ウツ屈したものが爆発したのは、波止場の見送りに来るときに黄色い帽子をかぶって来ると出発の前夜に言ったときだ。あれは目立っていていいと彼女は言った。それは名案だと彼も相槌を打っている、——さんのときもいつもそうやって見送りに行っていたのともなげにつづけた。彼ははじめて妻の頬を打った。彼女は予期したようには泣き出さなかった。ただ、黙ってその夜をすごした。

出発前に支社に顔を出す必要のあった彼とは波止場で落ち合うことになっていた。しかし、彼女は現われなかった。時間が来て、彼が乗船して、船がゆっくり岸壁を離れかけたときに彼女は来て見送り人の列に加わった。黄色い帽子をかぶっていた。それはあざやかに黄色だった。

国井の耳にはその夜の河本のひきつった声のときれとぎれのひびきが残っているような気がするが、そのあと、河本は国井に会ってもそ知らぬ顔をしていた。河本はほんとうにそのとき壁にむかっでも話したい気になっていたのにちがいない。国井はたしかに壁だったのだろう。河本と会ってかえってバツのわるい気持に国井は航海のあいだじゅうなっていた。そして、そのまま、シアトルに着いて別れた。

十年経って、ある地方都市のホテルのバーで国井は河本に偶然出会った。目ざとく彼を見つけて、やあとなつかしげに河本は寄って来た。国井も出張なら河本も出張でその都市に来ていて、出張どうしの気安さで二人はしばらく四方山話をしながらのんだ。河本はもといた中堅どころの会社から大手の会社に引き抜かれたのか、その誰もが名前を知っているような造船会社の現場の課長になっていて、得意そうだった。国井もめでたく転職がかなって、それもまったく方面ちがいいの食品会社の課長になっていて、これも河本から見れば十分得意げに見えていたにちがいない。このあいだは実にユカイでしたというハガキが河本からそのあとすぐとどいた。

話のあいだに、奥さんはお元気ですかと国井は何気ない口調で訊いていた。元気ですよ。子供が三人になりましたねと大手の造船会社の現場の課長はすぐ答えた。

それからまた十年が経って、今度は偶然に出会ったのは河本ではなかった。駅のプラットフォームでつい先日もと同室の佐川に出会ったのである。立ち話のなかで、ふと思いついたように佐川が死んだ河本がねというようなことばを出した。聞きとがめてといただと、おや、キミは知らなかったのかねと佐川が逆におどろいた顔になった。急性の心不全で河本が死んでからもう半年ほどが経っている。死亡通知はそのとき友人知己には送られていたはずだという。まあミスかも知れんが、このごろの郵便はなっていないからねと佐川が弁解がましく言うのをさえぎるようにして、奥さん、いや、未亡人は元気ですかねと訊くと、死ぬまえに彼、離婚していたらしいよ、ボクもよく知らんがねと佐川

はことがらにしくくりをつけるように言った。

船を見たあと、国井は約束通り藤子をスカンジナビア料理のレストランに連れて行った。二階建てのかなり広いレストランで、二階に上った。そこからは近くの時計塔の時計がよく見える。食事がすんだあとで、藤子はちよつと失礼と言って姿を消したと思つたら、手洗いで化粧をなおして来たらしく口紅があざやかな紅色になつていた。見ていてふしぎに心が和んだ。ブドウ酒のほどよい酔い心地も手伝つていい気持だつた。その気持のまま河本の話をしようとしたところで、藤子のそのきれいに口紅をはいた唇が動いて、お父さん、相談したいことがあるのといふことばになつた。とつぎのあいだに藤子の恋愛沙汰のことにちがいないとからだをかたくして身がまえる姿勢になつていたが、高志のことなんですけどとはぐらかすようにつづけた。気はやさしくて、力もちの高志くんのこと、ともわざとらしくおどけて言つた。高志の何んだ。とがめだてする声に自然になつていた。

お母さんとも相談したんですけど、今日、お父さんに言うのがいちばんよいと思つて、と言いかけるのをさえぎつて国井は、それでついて来たのかとつづけた。藤子はうなずき、うなずいてから、それだけじゃない、自分もお父さんの船を見に来たのだと弁解がましくつけ加えた。それで——と国井は切口上になつていた。何んだね、いったい。

志望のことなんです、大学の。藤子のことばを国井はまたさえぎつていた。工学部に行くんじゃないのかね。藤子がかぶりをふつた。防衛大学校へ行きたいと言つているんです。海上自衛隊へ入

りたいんですって。何んだって、と国井は声をあらだてていた。船に乗りたいたんです、あの子。軍艦に……昔、ちよつとぐれたとき、海上自衛隊に体験入隊させてもらったでしょ、お父さんの会社の人に口きいてもらって。あれで、あの子、立ちなおった。そのときからずつと考えていたんですって、これをオレの一生の仕事にしよう。お父さんだって、昔、海軍に志願しようとしたことあるんでしょう、お母さんがそう言っていた。そのまえに戦争が終ってしまっただって……よく考えぬいたことをしゃべっているという強さが藤子のことばのはしびしに出ていた。国井は押されるものを感じて黙っていた。藤子のことばが途切れたところでようやく、お母さんはどう思っているのかねと気弱に言った。お父さんさえよければとおっしゃっていました。藤子は国井ひとりに対決を迫るように口紅のあざやかな口でハキハキと言った。

ふと思いがきた。それは高志とオレはこれまでいっただい何を話していたのかという思いだった。もちろん、藤子ともだ。いや、良子ともだ。足もとがストーンと切れていた。窓の外に海は見えなかったが、たしかにそんな感覚があった。

つづきは製品版でお読みください。